

社会科学方法論としての弁証法の定式化 表象および存在形態と本質 (中)

板 木 雅 彦

目 次

はじめに

第1節 表象とその純化

第2節 純化された表象 要素と連関性 (第14巻4号, 2002年3月)

第3節 存在形態と本質

1. 本質をとらえる

2. 存在形態

3. 一般的存在形態の二つの型 単層構造と多層構造

4. 一般的存在形態と仮象 (以上, 本号)

5. 本質

6. 事物の生成 素材から要素へ

7. 矛盾

8. 三つの連関性 一様性, 多様性, 統一性

第3節 存在形態と本質

1. 本質をとらえる

いまわたしたちは、事物の純化された表象を前にしている。この表象は、片時もとどまることなくつねに変化と運動のまっただなかにある事物を、瞬間写真のように切り取ってわたしたちの眼前にすえ付けてできあがったものである。この純化された表象から事物の本質を抽出することが、次の課題である。

わたしたちの「思考実験室」の中に静かにすえられた純化された表象は、たしかに漱石の

言う「琥珀のなかに封じ込められてしまった蠅」のような有様をしている。これをどのようにいじくってみたところで、事物の本質は浮かび上がってこないのではないのか。いや、そんなことはけっしてない。「思考実験室」を飛び出して、現実の運動と変化のただなかにある事物を観察するのは、やはりまだ時期尚早というものである。この静止した表象をじっくりと観察すること　ただし、さまざまに視点を変えながら観察することが、まずは必要なのである。では、それをどうやって行なうか。どのようにスナップ・ショットを駆使することで事物の本質をつかみとるか。これが課題である。

この課題を達成するために、三つの分析用具と三つの視点を用意しようと思う　たとえば、顕微鏡と虫眼鏡と肉眼がそれである。

まず、一つ一つの要素に関しては、**顕微鏡**で観察する。それから次に、いくつもの要素が互いに連結している様子を観察するには、**虫眼鏡**が一番便利である。そして最後に、事物を全体として観察するには、わたしたちの**肉眼**をしっかりと駆使しなければならない。こうして、顕微鏡、虫眼鏡、肉眼という3種類の視点から写し撮られた3枚のスナップ・ショットが、静止状態にある被写体の、いわば「決定的瞬間」である。

どうしてこの3枚きりのスナップ・ショットが必要かつ十分な事物の「決定的瞬間」なのかというと、これ以外のありとあらゆるスナップ・ショットは、結局この3枚に還元されてしまうからである。このことは、ちょうど素人のホーム・ビデオにたとえてみることができるかもしれない。今日では、スナップ・ショットを無数に連続させて動画にするビデオ・カメラが一般家庭にも広く普及しているが、下手なホーム・ビデオで何時間も撮影するよりも、プロの写真家の撮ったたった3枚のポートレートの方が、その人物の性格や生い立ちや出身階層までも端的に物語っているようなものである。

さてここで、このような事物の本質をつかみ取ろうとするわたしたちの思考過程の問題にかかわって、『自然の弁証法』の中でエンゲルスが与えた弁証法の3法則に関する有名な言及に触れておきたい。

「自然および人間社会の歴史からこそ、弁証法の諸法則は抽出されるのである。これらの法則は、まさにこれら二つの局面での歴史的発展ならびに思考そのものの最も一般的な法則にほかならない。しかもそれらはだいたいにおいて三つの法則に帰着する。すなわち、
量から質への転化、またその逆の転化の法則、
対立物の相互浸透の法則、
否定の否定の法則。

これら三法則はすべて、ヘーゲルによって彼の観念論的な流儀にしたがってたんなる思考法則として展開されている。...われわれがもし事柄をひっくりかえしてみるならば、す

べては簡単になり、観念論の哲学ではことのほか神秘的に見えるあの弁証法の諸法則はたちどころに簡単明瞭になるのである。」（エンゲルス [1873 - 83] 1 , 65 - 66 ページ）

すでにわたしたちが詳しく検討したように、自然と社会という客観的世界と、認識という主観的世界におけるあらゆる事物は、要素と連関性という二つの対立するモメントの統一物ととらえることができる。このうち要素が量的側面を、連関性が質的側面を代表している。したがって、事物と認識の変化・運動というものも、要素の量的変化と連関性の質的变化とに大きく二分されることになるだろう。とするなら、連関性にかかわる質的变化は、エンゲルスの主張するように 要素の量的変化によって、そしてそれによってのみ引き起こされると考えることができる。

なぜなら、わたしたちが観察している事物の質的变化が、その事物にとって外部的な原因によって引き起こされたのでないとするなら、わたしたちは、その変化の内的な根本的な原因を、その事物そのものの質的でない変化、すなわち要素の量的な変化に求めざるを得ないからである。要素と連関性とに明確に区分された二つの対立的モメントの一方の変化を説明するものは、他方の変化をおいて他にない。

以上のエンゲルスの言及をわたしたちがいま問題にしている事物の認識過程に応用してみよう。

わたしたちは、事物の純化された表象において、対立物の統一（あるいは相互浸透）という事物の側面を、要素とその連関性の統一ととらえた。これにもとづいて静止状態にある事物 あるいは、より正確にはその存在形態 をとらえるためには、わたしたちの認識のなかで要素を一つ一つ順々に連結していくことによって、事物の認識を質的に変化させていかなければならないだろう。そして、その順番は、まずは要素一つだけの個別的なものから出発させて、次に諸要素をさまざまに連結させた特殊なものへ進み、そして最後にすべての要素を全面的に、そして統一的に連結、連関させた一般的な認識へと進んでいかなければならない。これが、「否定の否定」ということの意味する内容である。これはちょうど、わたしたちが言うところの顕微鏡的認識、虫眼鏡的認識、肉眼的認識に対応している。

2 . 存在形態

ではまず、事物の存在諸形態をとらえる作業を開始したいと思う。

日常の実践活動を通じてわたしたちは、事物がじつにさまざまな姿・形をとって現われでてくことを知っている。しかも、それだけではない。そのいくつかのものは、明らかに正反対の性質を示しながら、共存したり衝突しあったりしていることもしばしばである。わたしたちが「事物を全面的に明らかにした」と断言できるためには、 運動と変化と

いうことをいまのところ除いて考えれば、このようにいっけんしたところまったく相反するように見える現象も含めて、「静止画像」に収められたあらゆる現象を包括的に、統一的につかむことができなければならないということになる。

したがって問題の核心は、あらゆる現象の包括的・統一的理解を可能にする方法の工夫なのである。しかし、これはきわめて困難な課題である。

さまざまに変化し、微妙に相違する種々の現象の数は、無限と言ってよい。この無数の現象をたんに恣意的に、思いつくままに分類して、手前勝手な解釈を施すのではなく、必要かつ十分な「基本形態」に整理しようとするのは、事物に対するわたしたちの最小限の科学的態度であるといえるだろう。このことを、現象を形態に変えていこうと言い換えてもよからう。

その際にもっとも重要な視角は、何よりもわたしたちの認識を一步一步発展させていくという視角であろう。

つまり、さまざまな現象を一気に、かつ包括的にとらえようとするのではなく、そのような試みは、無謀以外の何ものでもない。まずは、事物のもっとも単純で個別的な形態から出発することである。言い換えれば、事物の要素そのものを純粹に観察することを、わたしたちの分析と認識の出発点にすることである。

だから、わたしたちがまず第一に取り扱わなければならない形態は、たった一つの要素からなる形態。すなわち、わたしたちの「思考実験室」のなかでその他の要素から切り離され、いままさに顕微鏡観察されようとしている形態がそれである。

たった一つの要素からなるこの形態では、当然事物の質は顕在化されておらず、潜在的なものにとどまっている。事物の質は、何よりも要素と要素のつながりの中から生まれるものだからである。したがって、「これははたして事物か」と問われれば、「事物である」とも言えるし、「事物でない」とも言えるだろう。わたしたちの認識の上で、「これから事物を形作っていく」のであって、「まだ事物ではない」のである。しかし少なくとも、「すでに事物を形作りつつある」ということだけは確かな形態なのである。わたしたちの認識の上でぎりぎりにまで単純化され、また事物の発生史上も個体として存在できる最小限の単位であるこのような事物の形態が、事物の純化された表象から最初に導かれる形態の内容なのである。

ここで少し、事物の存在形態と存在の認識形態の区別、そして事物の認識過程と現実の生成過程の区別について触れておくことにしよう。わたしたちがいまここで論じているのは、正確に表現すれば、事物の存在の認識形態であって、事物の現実の生成過程でもなければ、事物の存在形態そのものでもない。この違いは、十二分に意識されなければならない。

わたしたちはいま、現に完全な姿で存在している事物を認識するために、それを個別要素

にまで分解して顕微鏡観察するのであって、この個別要素がそのままの形で現実に存在すると主張しているわけではけっしてない。そのような意味において、わたしたちがいまここで論じているのは、あくまでも事物の存在の認識形態なのである。しかしながら、このことは、二点にわたって留保されなければならない。

第一に、このような個別的形態が未成熟な形態、あるいは従属的な形態として、完成形態とならんで現実に存在することがあるという事実である。第二に、事物の発生過程においては、現実にこの個別的な形態が歴史的に存在し、完成形態はまさにここから発展してきたという事実である。この二つの意味において、存在の認識形態は、現実の存在形態、および生成過程を理解する鍵を提供している。

では、この単純で個別的な形態の内容を具体的に規定していこう。

本来、諸要素の中の一成分として、ある連関性をもって存在していた要素は、他の諸要素から分離されることによって、いままでもっていた連関性を失ってしまうだろう。しかし他方、連関性がまったく何の痕跡もなく消失してしまうと考えることはできない。もし仮にそうだとすると、連関性の「一かけら」も含んでいない要素を、今度は逆にいくら数珠つなぎにしても、無から有が生まれれないと同様、諸要素の連関性は生まれようがないはずである。諸要素がたんに並存しているだけで、量的変化は、質的变化に転化しないことになる。この推論の誤りは、分離された個別要素から連関性が完全に消失したと仮定したことにある。

したがって、たとえ一つだけ分離されたとしても、その要素が連関性を完全に失ってしまったと考えるわけにはいかない。連関しようにも連関するべき相手から切り離されてしまったために、その連関性が、顕在的なものから潜在的なものに転化したと考えなければならない¹⁾。

このように、他の諸要素から分離され、個別化されて取り上げられたために、その質的な連関性を潜在化させた存在形態を、事物の**個別的な存在形態**と呼ぶことにしよう。

以上の検討から明らかなように、この形態の特徴は、何よりもその量的な個別性にあり、またその個別性ゆえの質的な潜在性にある。だから、わたしたちは、この形態の主要なモメントを個別的要素、次要のモメントを潜在的な連関性において定式化することができると思う。

個別的な存在形態 = [個別的要素 潜在的連関性]

マルクスが『資本論』第1巻の価値形態論で行なったように、実際の分析においては、この個別的な現象形態にこそもっとも多くの紙幅を費やして、その特質が論じられな

ければならない。潜在的なものにとどまっているためあくまで可能性としてではあるが、後に要素の量的変化にともなって本格的に展開されていくことになるあらゆる連関性の萌芽が、この形態の中にもっとも単純かつ純粋に現われているからである。ところで、上でも少し触れたように、個別的形態がこのままの姿で現実に存在することがある。すぐあとで論じられることになる事物の特殊の形態や一般的形態と並んで、個別的形態が、たんに認識上というのではなく、現実の存在形態として存在することがある。

その場合に個別的要素は、自分もっている潜在的連関性を、もう一つ別の個別的要素とのあいだの一对一の関係によって表現しようとする。なぜなら、要素がただ一つぼつねんと存在しているだけでは、たとえ潜在的にしる連関性がたしかに存在しているのだという事実を表わすことができないからである。連関性は、やはりその他の要素との何らかの関係においてしか表現することができない。ここから、個別的形態は、現実の一存在形態として現われる場合には、次のような形態に転化して現われることになる。

個別的形態 = [個別的要素 その他の個別的要素]

主要モメントの個別的要素は、連関性を表現するものとしての要素、次要のモメントの個別的要素は、この連関性の表現に利用されている要素である。後者の要素は、その具体的な生身の姿そのものを利用して連関性を体現し、いわば鏡のような存在として、主要モメントの個別的要素のもつ潜在的連関性を映しだしているわけである。

個別的形態は、その個別性のゆえに、事物の本質を表現する形態としてはまったく不完全なものであることもまた、明瞭である。

確かに、この形態のなかに事物の本質の萌芽が宿っているにしても、なぜその特定の要素が選ばれたのかと問われれば、たまたま偶然そうなのだとしか答えようがないからである。あくまで個別的で偶然的な現象形態という限界を、この形態は、越えることができない。

したがって、わたしたちは、数ある諸現象のなかからこの個別存在形態に続けて、次の典型的な形態を探しださなければならない。

わたしたちはこれまで、顕微鏡という分析用具を用いて、個々の要素を観察してきた。その特質が何よりも潜在的な連関性にあったことは、もはや繰り返すまでもない。しかし、なぜ連関性が潜在的であったのかと改めて問い直せば、その理由は、連関性を顕在化させるための下限値に要素量が到達していなかったためである。そうすると、要素の量的変化が最小値 1 からこの下限値に達するまでは、量的変化にもかかわらず質的には一定 つ

まり、潜在的　と考えられるから、この範囲に含まれるすべての現象は、個別的存在形態によって代表させることができる。

したがって、この個別的形態の次に考察されなければならない形態は、量的にはこの下限値から上限値に至る範囲まで要素が連結・展開したものとなる。

要素量がこの範囲に達することによって、いままで潜在的なものにとどまっていた連関性を顕在化させることができるわけである。そうなると、もう顕微鏡では役に立たない。多数の要素の連結の具合が観察されなければならないから、**虫眼鏡**が必要になってくる。このように、観察の視点を段階的に移動させることによって、事物のまったく異なったより正確には、対立的な　質を観察することが可能になるわけである。

この新たな形態の何よりの特徴は、量的な展開そのものではなく、その結果として顕在化するさまざまな質的連関性を観察できることにある。

つまり、個別的形態が量的な個別性を何よりの特徴としていたのとはちょうど逆の関係に立つことになる。そして、この連関性は、諸要素の異なる連結に応じてまさに千変万化しつつ顕在化する。このことは逆に言えば、事物のさまざまな質が百花繚乱しつつも、そこに何らの統一性も単純性も一般性も存在していないということを意味している。顕在化する一つ一つの連関性は、あくまでも特殊な連関性にとどまっているのである。

このような事物の存在形態をわたしたちは、**特殊的存在形態**と呼ぶことにしよう。その主要なモメントは、上の考察から明らかなように「顕在化する特殊の連関性」であり、次要のモメントは「展開する諸要素」である。

特殊的存在形態 = [顕在化する特殊の連関性　展開する諸要素]

この定式を観察すると、個別的存在形態と同様に「連関性」と「要素」の二つのモメントによって構成されながら、主要と次要の関係がちょうど逆になっていることがわかる。量的モメントの展開の結果、二つしかないモメントが逆転する　すなわち、質的に転化したわけである。したがって、事物の個別的存在形態と特殊的存在形態は、概念のもっとも正確な意味において、対立物を構成していることがわかる。

しかし、同じ対立物でも、この両形態の関係が反照（反省）関係と異なる点は、まず、一つの形態内部の二つのモメント間の関係ではなく、一つの事物の二つの現象形態間の関係であるということ。次に、この両者の関係が、認識の上で同時に存在する不可分の二つのモメントの関係ではなく、事物の認識の単純で抽象的な段階と発展した具体的な段階の関係であるということである。

この特殊の形態の場合にも、たんに認識の形態というだけにとどまらず、これが実際に独

立した形態として、他の諸形態と並んで存在することがある。

そのような場合には、「顕在化する特殊的連関性」がある特定の要素、すなわち特殊的要素に体现されて現われることになる。なぜなら、上の認識形態のままでは、顕在化したはずの連関性がまるで宙に浮いたようなつかみどころのないものにとどまって、特殊的にしるその存在を十分現実化させたことにならないからである。やはり、連関性は、その他の要素との関係においてしか表現することができない。したがって、特殊的形態が現実の存在形態として現われる場合には、次のような具体的形態に変化して現われることになる。

特殊的形態 = [特殊的要素 展開する諸要素]

つまり、個別的形態のときとは逆に、次要なモメントの諸要素が主要なモメントの要素を利用しながらその連関性を表現するわけである。ただし、個別的形態のときと違って、連関性の表現に利用される特殊的要素は一つだけではない。次要のモメントの諸要素のさまざまな展開に応じて、そのつど特殊的要素が一つ選び出されて連関性の表現に利用されるわけである。

ところで、特殊的形態のもっとも重要な特徴は、すでに述べたように、今まで潜在的なものにとどまっていた諸要素間の連関性が、この形態によって一気にわたしたちの眼前に現われでてくることにある。しかし、このことは同時に、このような形態において事物の存在形態をわたしたちが認識することの限界、言い換えればその特殊性を物語るものでもある。それは、「展開する諸要素」ということのかなかに端的に示されている。

第一に、要素の量が大きくなるにしたがって、諸要素の組み合わせの可能性は、ほとんど無限大となり、事実上どこまでいっても限界がない。その組み合わせに応じて、ありとあらゆる連関性を次々に顕在化させていく。しかも、この組み合わせは要素の量的拡大にともなって加速度的に増えていくから、いつまでたってもこの形態は完結することがなく、未完成なままにとどまらざるを得ない。

第二に、もし、事物の本質を構成する一般的な連関性を求めようとしても、これら種々さまざまな諸特殊連関性の単純な総計として表わさざるを得ず、結局は「ばらばらで雑多な寄せ木細工」(マルクス [1867] s . 78, 86ページ) に陥ってしまう。具体的には、事物の本質を描き出すと称して、実際には次から次へと諸特徴を列挙するような研究手法によって描き出された事物像がこれにあたる。

第三に、このような「寄せ木細工」的な弱点を克服して一般的な連関性をあぶりだそうと、いくつかの特殊的連関性を組み合わせてみても、それ自体さらに「寄せ木細

工」に屋上屋を架す結果に陥ってしまう。言い換えれば、どこまでいっても統一性を欠いた形態にとどまっている。

以上、一言で言えば、この形態の意義と限界は、これが「特殊的」形態であるということのなかに尽くされているわけだが、では、わたしたちは、この限界を越えて事物の**一般的存在形態**を認識することができるのだろうか。

その際、まず最初にかかる疑問は、次のようなものだろう。個別的存在形態と特殊的存在形態は、対立物の関係にある。量的に下限値未満、質的に潜在的な諸現象はすべて、個別的存在形態に集約されている。量的に下限値以上・上限値未満、質的に顕在的な諸現象はすべて、特殊的存在形態に集約されている。では、これら以外にいったいどのような現象が次の「第三の形態」のために残されているのかと。

豊かな現象に恵まれた研究対象に一度でも接すればすぐにわかることだが、一群の現象のなかには、個別的存在形態であるがまた同時にその対立物である特殊的存在形態でもあると考えざるを得ない形態がかならず存在する。この形態は逆に、両者の統一された形態であるという意味で、個別的存在形態そのものでもなければ特殊的存在形態そのものでもない。

つまり、個別的存在形態、特殊的存在形態を否定すると同時に、両者を合わせもつという意味で、この第三の形態は、事物の本質がもっとも完全に展開し尽くされた**一般的・普遍的な形態**であるということができる。こうして、単純で個別的存在形態の第一の形態、展開された特殊的存在形態の第二の形態、そして両者の統一物として、単純かつ展開された**一般的第三の形態** これら三つが揃ってはじめて、すべての基本形態が尽くされることになる。

では、この最後の**一般的形態**の具体的な内容は、いったいどのようなものとして認識されるのだろうか。そして、どのような意味においてこの形態は、対立する二つの形態の統一物なのだろうか。

ここでもう一度簡単に振り返っておくと、個別的存在形態は、形式的には単純であるが量的展開性に欠け、したがって、事物の質的連関性を潜在的にしか表わすことができないという特徴をもっている。これに対して特殊的存在形態は、量的に展開しはするが、顕在化する質的連関性を単純に表現することができず、したがって、量的にも全面的な展開を完結することができない。これら二つの形態の統一物としての**一般的存在形態**は、両者の限界を克服しつつ、事物の本質をもっともあらわに示すことのできる形態でなければならない。

すなわち、形式的な単純性のもとで事物の質的連関性をもっとも顕在的に表現し、そうすることによって全面的な量的展開性を実現する。一言で言えば、質的顕在性と量的展開性の完成である。このような**一般的形態**の特質は、質的顕在性を主要なモメントとする特殊的存在形態をその主要モメントにすえ、量的単純性を主要モメントとする個別的存在形態を次要モメントにすえ、この結合物を真の統一物へ向けて展開することで実現される。では、以上を定式を使って展開し

てみよう。

一般的存在形態 = [特殊的存在形態 個別的存在形態]

ここに個別的存在形態の定式と特殊的存在形態の定式を代入すると次の定式が得られる。

一般的存在形態 = [{ 顕在化する特殊的連関性 展開する諸要素 }
{ 個別的要素 潜在的連関性 }]

しかし、わたしたちは、この定式を個別的存在形態と特殊的存在形態の真の統一物とみなすことができない。

なぜなら、この定式においては、まだ二つの形態がたんに相並んで結合しているにすぎないからである。統一とは、たんなる並列や並存ではない。なぜなら、これでは二つの形態が混在しているのと何ら変わらないからである。統一とは、個々の形態の形式が否定されると同時に、その内容が組み込まれ、引き継がれて新たな形態を生成することと考えなければならない。このような意味において統一は、**止揚**であり**揚棄**である。

では、それはいったいどのような形式と内容をもった形態を生成することなのだろうか。まず、定式そのものの論理から考えてみよう。

わたしたちが求める形態は、個別的形態と特殊的形態を統一する一般的形態で、事物の本性をもっともあらわに表現するという使命から、顕在的連関性を主要モメントとする特殊的形態を自らの主要モメントにすえなければならないことは、すでに述べた通りである。したがって、特殊的形態の主要なモメントは「顕在化する特殊的連関性」だから、この一般的形態の主要なモメントを構成する主要なサブ・モメントも、この「顕在化する特殊的連関性」でなければならない。ところで、この「顕在化する特殊的連関性」に対する次要のサブ・モメントが「展開する諸要素」であれば、この二つのサブ・モメントの統一物は特殊的形態そのものになってしまう、自動的に一般的形態の次要のモメントも個別的形態そのものになってしまう。これでは、統一物にならないことは、すでに述べたとおりである。対立物の統一の原則を厳密に踏襲しながら、個別的形態と特殊的形態を統一し、止揚するためには、主要なサブ・モメント「顕在化する特殊的連関性」に対する次要のサブ・モメントは、「個別的要素」以外には存在しない。「潜在的連関性」では、対立物にならないからである。したがって、この二つのサブ・モメントから構成された主要なモメントに対する次要のモメントは、「展開する個別的要素」と「潜在的連関性」とによって構成されることになる。以上

から、一般的形態は、暫定的に次のような構成をとると考えることができるだろう。

一般的存在形態 = [{ 顕在化する特殊的連関性 個別的要素 }
 { 展開する諸要素 潜在的連関性 }]

つまり一般的形態では、特殊的形態と個別的形態それぞれの主要なサブ・モメントと次要なサブ・モメント同士が結合して、新たな二つのモメントを形成していることがわかる。このようにして、それまでの二つの形態の個性や特殊性といった形式が否定されながら、同時にそれら二つの形態の内容 質的顕在性と量的展開性 が結び付けられ、継承されることで、一般性が獲得されることになる。

しかし、もしそうであるならば、一般的存在形態において顕在化しているのは、もはや「特殊的連関性」ではなく「一般的連関性」でなければならないだろう。そして、顕在化の過程はこの一般的形態において完成しているのだから、「顕在化する」という進行形ではなく、「顕在化した」と完了形を用いるべきだろう。また、このような一般的連関性の確立によって、個別的要素も全面的な展開を可能にされるわけだから、「展開する」という進行形ではなく「展開した」と完了形を用いるべきである。以上、定式そのものの考察を通じてわたしたちは、次のように一般的形態の定式を確定することができたと考える。

一般的存在形態 = [{ 顕在化した一般的連関性 個別的要素 }
 { 展開した諸要素 潜在的連関性 }]

では、このように純粹に論理的に まさに、形式論理的に 導かれた一般的形態は、その内容においていったい何を意味しているのか。

いっけんして明らかなように、次要のモメントでは、個別的要素が展開しているにもかかわらず連関性は潜在的なままにとどまっており、主要のモメントではこれと対照的に、顕在化した一般的連関性がある特定の個別的要素によって担われるものとされている。これらはいずれも、従来の定式化の原則からすればまったく逸脱としか思われられないものである。しかしながら、

第一に、この形態によって事物の本質がもっとも単純に表現されている。

個別的要素は本来、他の諸要素から人為的に切り離されているために、事物の連関性を潜在的にしか表わすことができないはずである。しかし、一般的形態では逆に、ある特定の個別的要素が諸要素の中から抽出され、これがそ

の個別的な姿のまま直接に事物の連関性を体現し、顕在化させる。この特定の個別的要素こそが、事物の連関性そのものを具現するものとして現われる。ただ十分に注意しておかなければならないことは、この個別的要素の特殊な性格である。これも要素であるかぎり、ある物質として量も質ももっている。しかし、諸要素の中から抽出されて一般的連関性との関係のなかにその物質が置かれたとき、その量的・質的側面は、たんに一般的連関性を体化するための物的素材としての意味しかもたなくなる。つまり、直接には見ることも触れることもできない「連関性」を、まさに見ることも触れて感じることも計ることさえもできるものとして、物質化することがこの個別的要素の特殊な機能なのである。

第二に、この一般的形態によって事物の本質がもっとも統一的に表現されている。ある特定の要素が直接に事物の連関性を体現し、顕在化できるためには、他のすべての要素が直接に連関性を表わすことを共同して放棄し、この個別的要素との関係を通じて間接的に連関性を表現するのだからなければならない。これが「潜在的連関性」の意味するところである。このような統一性を獲得するためには、本来、自分たちのあいだでこそ顕在化していたはずの連関性、あるいはそのような連関性を表現する能力の放棄と委譲とが行われなければならない。事物の連関性を表現する能力は、本来属すべきものの手から、かれらの共同の代表者の手へと委譲される。したがって、両モメントは、互いに他を前提し、生み出し合い、相互促進的にこの一般的形態を形成していく関係にある。つまり、一般的形態の成立は、事物を構成する全要素の共同作業としてのみ可能になるのであり、社会的な事物の場合であれば、まさに社会的共同行為の結果として生みだされるものである。

第三に、事物は、この形態を獲得することによってはじめて、要素の全面的な量的展開と連関性の完全な顕在化を完成させることができる。

特殊的形態においても要素の全面的な展開への指向性、連関性の完全な顕在化へ向けた指向性はみられたわけだが、その完成は、この一般的形態の成立をまたなければならない。なぜなら、統一性を欠いた無政府的な要素の展開は、かならず相互間に衝突と矛盾を生じるものであり、いずれ量的展開の停滞をもたらさざるを得ないからである。したがってまたその反作用として、完全な質的連関性の顕在化も阻害されざるを得ないからである。一般的形態の定式においてはじめて、サブ・モメントの表現が「顕在化された一般的連関性」「展開した個別的要素」と「完了形」に置き換えられる理由は、ここ

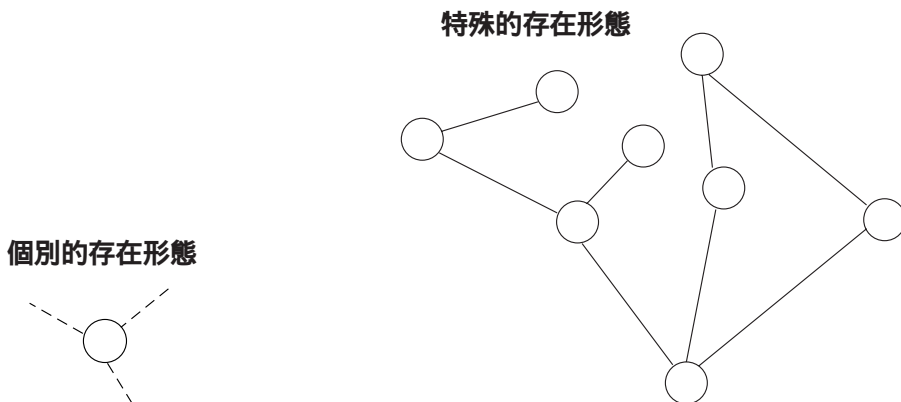
にある。

これまでわたしたちは、事物の表象を出発点として、その存在の三つの認識形態について論じてきた。つねに運動と変化のなかにある事物の本質をとらえるために、いわばもっとも典型的な三つの「静止画像」を獲得することがその目的であった。そして、顕微鏡的レベル、虫眼鏡的レベル、肉眼的レベルという三つの視点から観察することによって、「静止画像」を三つの定式に「焼き付けた」わけである。事物の存在を写し撮るには、定式は三つ以上であってはならないし、三つ以下であってならない²⁾。以上から明らかになったことは、事物が事物そのものであるための量的側面と質的側面を単純かつ統一に反映する一般の形態こそが、事物の本質をもっともよく表現するものであり、したがってまた事物の本質をもっとも正確に認識することのできる形態でもあるということである³⁾。

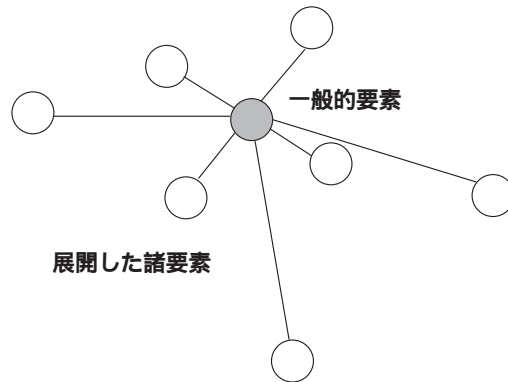
そして、すでにわたしたちが見てきたように、この一般の形態では、事物の質的側面が特定の個別的要素に固着し、量的側面が展開された個別的要素に固着することになった。そこで、個別的要素に体现された一般的連関性という意味で主要モメントを**一般的要素**と呼び、連関性を奪われて量的展開だけを担うことになった次要のモメントを改めて**諸要素**と呼ぶことにしよう。すると、わたしたちが目にする事物のもっとも一般的な存在形態は、改めて次のように書き換えることができる。

事物の一般的存在形態 = [一般的要素 展開した諸要素]

以上の三つの存在形態を、イラスト化することによって直感的、感性的に理解できるようにしておこう。が要素を表わし、これらをつなぐ実線および破線が連関性を表わしている。



一般的存在形態



最後に、今後の参照の便宜のために、わたしたちがこれまでに獲得してきた諸定式を整理しておくことにしよう。

- 事物の存在の表象 = [連関性 要素]
個別的形態 = [個別的要素 潜在的連関性]
特殊の形態 = [顕在化する特殊の連関性 展開する諸要素]
一般の形態 = [{ 顕在化した一般的連関性 個別的要素 }
{ 展開した諸要素 潜在的連関性 }]
= [一般的要素 展開した諸要素]

これら諸定式が、かつてエンゲルスによって簡潔に整理された三つの根本的な弁証法の法則によって、そしてそれのみによって成り立っていることは明らかである。

第一に、事物の表象を表わす定式は、対立物の統一を表わすものにほかならない。第二に、個別的形態から特殊の形態への推移、そして特殊の形態から一般の形態への推移は、量的変化の質的变化への転化を表わすものである。そして最後に、これら三つの形態のあいだの関係は、否定の否定の関係を示しているわけである。

いままで繰り返し強調してきたように、この三つの形態は、事物の存在の三つの認識形態を示すものであるが、これは同時に、抽象的なものから具体的なものへと進んでいくわたしたちの認識の諸段階を示すものでもある。

たまたまそこに存在しているというだけの要素を個別的にとらえる認識の段階は、**感性的認識**である。次に、諸要素をさまざまな連結のもとに置くことによってその質をとらえようとするが、まだその認識に統一性を欠いている段階が**悟性的認識**である。そして最後に、事物の存在をもっとも一般的にとらえる段階が**理性的認識**と呼ばれる

段階である。これら認識の諸段階は、事物の存在形態だけでなく、その機能・制限形態、生成・転換・発展過程の認識においても繰り返されることになる。

3. 一般的存在形態の二つの型 単層構造と多層構造

以上、事物の一般的存在形態の定式化を完了した上で、わたしたちは、この形態の二つの型を区別しておかなければならない。すなわち、**単層構造**の一般的存在形態と、**多層構造**の一般的存在形態がそれである。

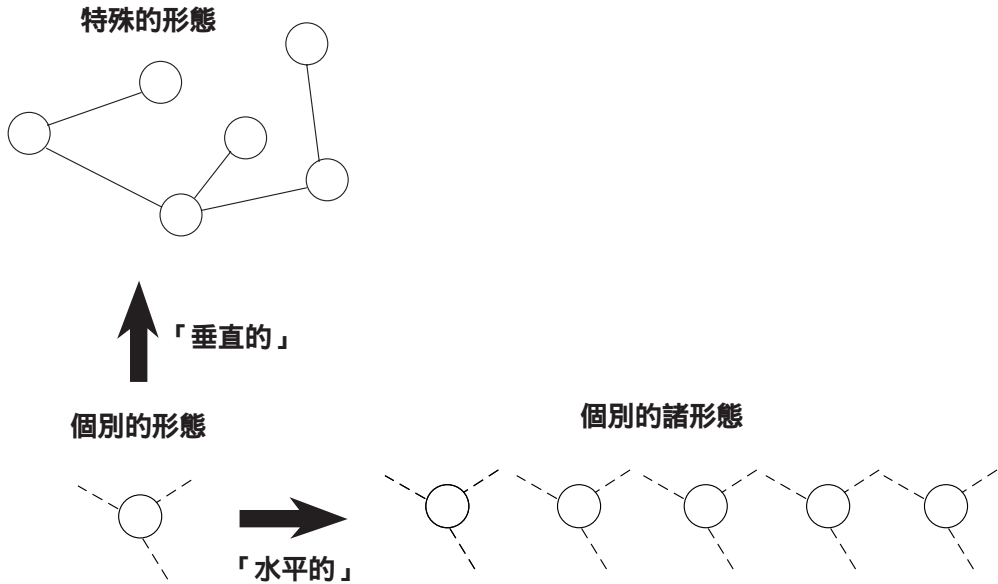
単層構造の一般的存在形態とは、わたしたちがこれまでみてきたような一般的要素と展開した諸要素が直接結合することで構成されている一般的存在形態である。つまり、要素が展開していったん特殊の形態を形成するが、要素の中から一般的要素が抽出されることによってこの特殊の形態が解消され、一般的形態をとるにいったものがそれである。

このような単層構造の特徴が、何よりその単純さにあることはいうまでもない。一般的要素と個別的要素は、何の媒介もなく直接的に結び付けられている。このような例として、貨幣と商品との関係をあげることができるだろう。金本位制の時代を思い浮かべるとよくわかるように、商品としての資格においてはまったく同等なあらゆる商品が、唯一の貨幣商品・金に直接結び付けられている。

では、多層構造の一般的存在形態とはいったいどのようなものだろうか。この問題を考えるにあたっては、もう一度個別的な存在形態から、特殊的存在形態、一般的存在形態にいたる認識上の展開過程を振り返っておく必要がある。

わたしたちは、まず最初に単一の要素からなる個別的形態から出発した。そして次に、要素を量的に展開し、連結することによって構成される特殊の形態を考察した。これを言い換えれば、要素の量的展開が事物の存在形態を個別的形態から特殊の形態へ転化させるという意味で、量的展開をいわば「垂直的に」とらえたわけである。

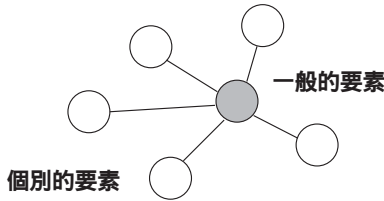
しかし、ここで次のように考えられないだろうか。つまり、量的展開が即座に形態転換に結び付くのではなく、いわば「水平的に」次から次へと個別的形態が並列して展開すると考えるわけである。これらは、量的には展開するが、相互に関連しているわけではなく、互いに自立性を保ったままの状態に置かれている。つまり、個別的形態から特殊の形態へではなく、個別的諸形態へ展開するととらえるわけである。これを次のようにイラスト化してみよう。



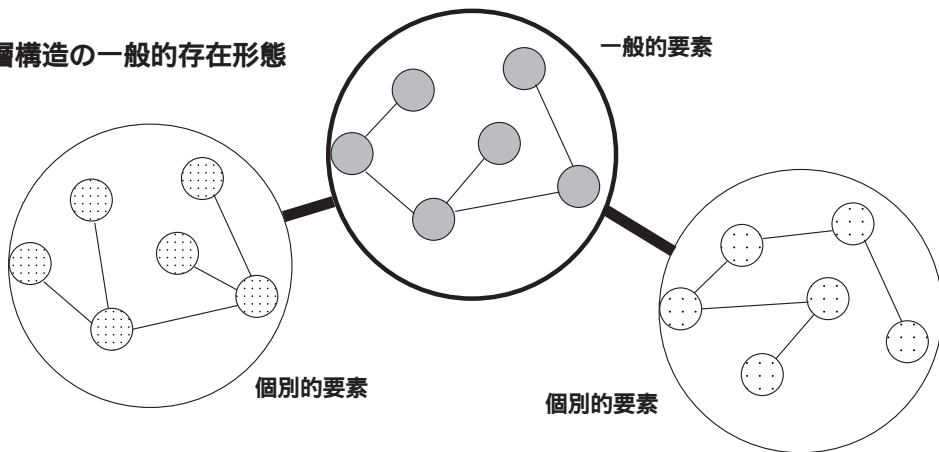
さらに、このような「水平的な」量的展開から生じた個別的諸形態の各々が「垂直的な」量的展開をとげると、今度はさまざまな質をもった特殊の諸形態を形成することになる。この特殊の諸形態のもつ質の多様性は、諸要素の連結の多様性にもとづくものである。

では、このようにして形成された特殊の諸形態は、どのように一般的形態を構成することになるだろうか。もし、各々の特殊の形態が独自に、自立的な一般的形態を構成するとしたら、単層構造の一般的形態の形成過程をたんに複数回繰り返しただけということになってしまう。したがって、もし従来と異なる独自の一般的形態が構成されるとするならば、それは、それぞれの特殊の形態がいわば一個の「個別的要素」のようにして相互に連結する以外になかろう。ただその場合も、すぐに「一般的形態」が形成されるわけではない。「個別的要素」がまず「特殊の形態」を形成し、その中の一つが「一般的要素」として選び出されることによってはじめて「一般的形態」が形成されることになる。このようにして成立したものが、多層構造をもった事物の一般的存在形態である。単層構造と比較しながら、これを次のようなイラストで示すことにしよう。

単層構造の一般的存在形態



多層構造の一般的存在形態



この多層構造の一般的存在形態に特徴的なことは、その質的な複雑性である。この複雑性は、構造の階層性からくるものである。

つまり、単層構造の場合と異なり、個別的要素の結合によって生じた特殊の形態が解消されることなく、そのまま一回り大きな要素としてさらに結合を続けていくからである。したがって、一般的形態の内部には、個別、特殊、一般という三つの階層が同時存在していることになる。そして、中間の層をなしている特殊の形態は多様性を特徴としているから、その一つ一つが分業して一般的形態のさまざまな機能を担うことになる。言い換えれば、種々の器官・機関として一般的要素のもとに統合されているわけである。

そして、このような構造上の多層性、質的な複雑性のもとに、要素結合の大量性が実現されることになる。

ただし、多層構造の階層の数がかならずしも三つとは限らないという点に留意しておこう。特殊の形態同士の結合によってさらに上位の階層の特殊の形態を生じる場合もある。そのような場合に一般的形態の構造は、三層、四層、五層と、次々に複雑さの

度合いを増していくことになる。しかし、わたしたちは、この三層構造によってそれ以上の多層構造を代表させることができると考える。

わたしたちが日常目にする生物体や社会機構の多くは、単層構造よりもむしろ多層構造を示していると考えられる。しかし、それまで単層構造とみられていたものが、じつはより大きな多層構造の中の部分構造であることが新たに発見されることもあるだろう。また逆に、分析の単純性を確保するために、多層構造をひとまず単層構造としてとらえることも論理的には十分可能であるし、また必要なことでもある。したがって、実際の分析の際には、両者があくまで相対的にのみ区別されることに十分留意しておかなければならない。

4. 一般的存在形態と仮象

ここで、諸要素の共同の社会的行為を通して生みだされた一般的形態のもとで、認識上の転倒現象が生じ、現象を観察するわたしたちの眼にある種の**仮象**が生まれることについて触れておきたい。その仮象は、次のような事情から発生する。

諸要素間の連関性は、右項の次要モメントに展開した個別的要素間の関係に本来属するものである。ところが一般的形態では、本来単独では連関性を顕在化させるはずのない特定の個別的要素が、そのままの姿でこの連関性を一身に体現したのものとして現われている。この裏返しとして右項の個別的要素は、全面的に展開しているにもかかわらず連関性を潜在化させている。

したがって、展開した個別的要素が本来有していたはずの要素間の連関性を実現するためには、いったん回り道をして、まず個別的要素の一つがこの特定の個別的要素（＝一般的要素）と関係を取り結び、さらにこの後者がその他の個別的諸要素と再び関係を取り結ぶことによって間接的に行なうしか術がない。

ところで、一般的要素は質的連関性を顕在化させるという機能を担い、その他の個別的要素は量的展開を行なうという機能分担を行なっている。この意味で両者は、まったくその機能を異にするにもかかわらず、互い同一の要素であるという点では何ら異なるところがない。したがって、ある共通の量的尺度にもとづいて個別的要素が一般的要素と比較され、その大小関係に応じて評価を受けるということが、両者の関係の具体的な内容である。一言で言えば、前者がある比率で後者と等値されることではじめて、間接的・後追いの、その個別的要素もじつは連関性をもっていたのだということが社会的に実証されるわけである。

本来連関性をもたないはずのものがそれを体現し、連関性をもっているはずのものがそれを喪失し、前者を介してはじめてそれを実証することができるという、一般的形態に特有の転倒性
これがこの形態の特徴である。

そしてさらにここから、要素の連関性は、そもそもはじめからこの一般的要素に自然的・本来的に備わったものであり、他の個別的要素を前提しなくても存在し機能する、あるいは逆に、この一般的要素を前提としてはじめてその他すべての個別的要素が存在することができるかのような仮象が生まれることになる。言い換えれば、諸要素の社会的関係のなかではじめて生ずるはずの連関性が、一般的要素の自然的な姿態に物化して独り歩きをはじめめるわけである⁴⁾。

（続く）

注

- 1) マルクスは、資本蓄積基金として積み立てられた貨幣を潜在的貨幣資本と規定したが、このことに関連してエンゲルスが以下のような注を与えている。
「つまり、剰余価値は蓄蔵貨幣に硬化して、この形態で潜在的な貨幣資本をなすのである。潜在的というのは、それが貨幣状態にとどまっているあいだは資本として働くことができないからである（6 a）。
6 a 「潜在的」["latent"] という表現は、潜熱という物理学的観念から借りてきたものであるが、この観念はいまではエネルギー転化の理論によってほとんど排除されている。それゆえ、マルクスは第三篇（もっと後で書いた部分）では、それのかわりに潜勢的エネルギーの観念から借りてきた「潜勢的な」["potentiell"]、またはグランペールの言う可能速度にならって「可能的な資本」["virtuelles Kapital"] という表現を用いているのである F. エンゲルス（[1885] s. 83, 97 ページ）
- 2) 見田は、価値形態論にかかわらせて、三つの形態について次のように述べている。
「第一形態は商品の価値表現としてはこれ以上に簡単なものが考えられない形態であり、また第三形態は、価値の相対的表現がなんらか自然的形態を必要とするかぎりそれ以上、完全なものが考えられない最高の形態である。これに対して第二形態は、これら二つの形態の双方に対して直接的対立物であるから、その唯一の媒介項である。だからこの三つの形態は価値表現のありうる、かつあらねばならぬ形態のすべてである。」（見田 [1963] 179 ページ）
- 3) マルクスは、単純性、統一性、一般性について、価値形態論にかかわって次のように述べている。
「いろいろな商品はそれぞれの価値をここ [一般的価値形態] では（1）単純に表わしている、というのは、ただ一つの商品で表わしているからであり、そして（2）統一的に表わしている、というのは、同じ商品で表わしているからである。諸商品の価値形態は単純で共通であり、したがって一般的である。」（マルクス [1867] s. 79, 88 ページ）
- 4) わたしたちは、このような仮象とそれともなう転倒性に関するまたとない好例を、マルクス『資本論』第1巻第1章第4節「商品の呪物的性格とその秘密」において明らかにされた商品と貨幣の呪物性（物神性）に見いだすことができる。

参考文献

第14巻4号（2002年3月）に掲載の参考文献を参照

Formulation of Dialectics as Social Science Methodology: Representations, Forms of Existence and the Essence (2)

Section 3 'Essence and forms of existence' deals with how to abstract the essence of a thing as the object of our research and thus, to transform phenomena into forms of existence. We intend to distinguish between the two types of the general form of existence and between materials and elements. Semblance arising from the specific feature of the general form of existence and contradiction within the essence will also be analyzed to deepen our understanding of the theme in section 3.

Part 1 'Abstracting essence' presents the three viewpoints which are necessary to grasp the totality of the thing: we call them the viewpoints of a microscope, a magnifying glass, and our naked eyes.

Part 2 'Forms of existence' clarifies the three forms of existence with the help of our basic formula of dialectics: i.e., the individual form, the particular form, and the general form of existence.

Part 3 'The two types of the general form of existence' distinguishes between the single-layered and the multi-layered structures of the general form of existence.

Part 4 'The general form of existence and its semblance' examines the reason why and the process in which the general form inevitably gives rise to its illusionary semblance, whereby the relationship ultimately originating in the individual elements appears to be deprived from them and monopolized in the hand of the general element.

(ITAKI, Masahiko 本学部教授)